

AFTERNOON TEA

根田茂川とフライフィッシング

岡崎統合バイオサイエンスセンター（生理学研究所）
細胞生理研究部門

齋藤 茂

昨年度まで同じ研究室に所属していた縁で、名古屋大学環境医学研究所の常松友美さんからバトンを受けました。温度受容体として働く温度感受性 TRP チャンルの機能が脊椎動物の系統でどの様に進化してきたのか？ また、環境適応にどういった役割を果たしてきたのか？ に興味を持っています。カエル、トカゲ、ニワトリなど興味を湧いた動物の温度感受性 TRP チャンルをクローニングしては機能を調べて比較しています。電気生理の実験が中心なので研究室で過ごす日々ですが、室内に籠るのは苦手な、休みの日は釣りやスキーと野外でリフレッシュしています。今は愛知県に居るので主に岐阜方面の釣行が多いですが、今でも時々行きたいなあと思う溪流があります。

大学院生活を過ごした東京からポスドクとして岩手大学に移動したのを機に、ずっと憧れていたフライフィッシングを始めることにしました。普通の釣りでは生餌を使いますが、フライフィッシングでは溪流魚が捕食する羽虫などを模倣した毛バリ（フライ）を使います。釣針に羽毛などを巧妙に巻きつけて羽虫に似せて作った毛バリを水面に流して、溪流魚を騙して食いつかせる釣り方です。実際は餌釣りのほうが良く釣れるのですが、フライフィッシングでは水面下から溪流魚がグワッと上がってきて、バシッとフライに食いつく過程が見えるので、とても興奮します。「旨く騙せたぞ」という感覚も魅力の一つでしょう。

岩手は良い溪流がたくさんありましたが、中でも根田茂川が心に残っています。給料が貰える身分になって1年間貯めたお金で中古の軽四駆（後に、常松号としても活躍）を手に入れて、とりあえず地図を見て行って見たのが根田茂川でした。



夏の根田茂川にて、フライに食いついたイワナを寄せて、網に納める瞬間（ここで逃げられると本当に悔しいので、緊張する場面でもあります）。

自分の名前の字が含まれているせいか、この川の魚たちはフライフィッシング初心者の私でも優しく迎えてくれ、それ以来、毎年通いました。盛岡市街から車で40分程と近いのですが、山間の田園を流れるとても雰囲気の良い川で、ヤマメとイワナが釣れました。釣りというのと一ヶ所に留まっているイメージがあるかもしれませんが、溪流釣りでは新鮮なポイントを求めて下流から上流へ釣りながら上っていきます。根田茂川では、下流ではヤマメが釣れ、ある所からイワナが混じるようになり、その内にイワナのみになります。イワナとヤマメは至適水温が異なるため流域を棲み分けていると言われていました。実際に、根田茂川でもヤマメからイワナに切り替わる場所が暑くなるにつ

れて、少しずつ上流側に移っていき、「本当に至適水温の種間差によるのかも」と感じたものです。将来的には、イワナ、ヤマメの温度受容体の比較もしてみたいと思っています。

釣り以外にも、春には山桜や交尾のために集まるイモリの群れ、緑が段々と濃くなっていく山々、夏にはカジカガエルの声を聞きながらの昼飯、間近で見るカワセミのハンティング、秋には紅葉などと、四季を通じて自然を楽しむことができる川でした。また、初夏にはサクラマス、秋になるとサケが遡上し、産卵行動を見ることもできました。盛岡は内陸に位置しているので、河口までは200 Km程もあるのですが、はるばる遡上し、ポロポロになっても産卵するサケは、生き物の逞しさだけでなく、「こんな内陸の山も海とつながっているんだなあ」と実感させられるものでした。こんなに自然を楽しめる川でしたが、とても残念なこと

に、根田茂川ではダムの建設工事が進んでいました。好んで通っていた流域も将来的にはダムに沈むそうです。ダムが完成する前に岩手大のポストドク任期が終わり移動したので、今はどうなっているのか分かりません。ただ、あの豊かな溪流がいずれ失われてしまうのは本当にもったいないと思います。

愛知県に移ってからは実はあまり釣れずにいます。多くの釣人に鍛えられたこの辺りの魚たちは、岩手ではそれなりに通用した自分の腕ではなかなか騙されてくれません。北国で育ったため、暖かい時期には溪流釣り、冬はスキーと趣味が寒い地方に特化してしまっています。研究ライフとしては良いポジションがあったらどこへでも移っていかねばいけない身ですが、できるなら将来は北の地方に住めると良いなと思っています。



溝の口界隈の紹介

聖マリアンナ医科大学生理学（統合生理）

藤原 清悦

東北大学大学院医学系研究科の菊田さんよりバトンを受けました、藤原清悦と申します。現在、恐怖条件付けしたラットから、海馬、前頭前野、扁桃体の神経活動記録を行っております。神経活動記録用の電子回路の一部を自作しており、最近では Analog Devices 社の AD623 を好んで使用しています。AD623 はレール to レール出力を持ち、低電圧（最低 3V）の単電源で動作します。ですから、ボタン電池等の小型電池を使用して機器を動作させたい時に有用です。以前は OP アンプを使用して増幅回路を設計しておりましたが、設計が非常に簡単な計装アンプを最近ではよく使用しております。

編集の方より「どんな形で書いて下さってもかまいません」と伺いましたので、これより先は大学の最寄り駅の一つである溝の口についてご紹介したいと思います。

溝の口は、JR 南武線と東急田園都市線が交差す

る、川崎市の副都心の一つです。

東急田園都市線といえば、沿線のたまプラーザ等の高級住宅街を思い浮かべる方々も多いと思われませんが、溝の口駅周辺は他の田園都市線沿線の街とは異なった雰囲気を持っています。

まずは、東急溝の口駅南口から右手の方へ歩いていくと飲食店が集まった通りがあります。この周辺の居酒屋では、店の道路側（軒下）にも席が設けられています。ここで飲食すると料金が安くなるのです（全品 10% 引とか、トータル料金から 500 円引とかあります）。そのせいかは分かりませんが、真冬でも大雨の日でも、必ず外で誰かが飲んでいました。欧米の飲食店によくあるテラス席を想像されるかもしれませんが、ここはあちらと違ってあんなに広くて優雅ではありません。席に置かれた七輪から濛々と煙が上がり、様々な肉を焼く匂いが路上に立ち込めて、アジア的なカオスを醸し出してあります。これがまた食欲を刺激し



溝の口駅西口商店街入口



外で飲む筆者

ます。以前、全品10%引に惹かれて真冬に外で飲んだ事がありますが、あまりに寒くて酒が進まず、結果的に安く済んだ記憶があります。こういった節約の効用もあるのでしょう。

この通りを真っ直ぐ進んで、跨線橋を渡ると、溝の口駅西口商店街になります。この商店街は戦後のヤミ市から発展した姿を現代まで留めている貴重な存在です。再開発が進んだ他の地区とは一線を画した非常に味わい深い様相を呈しております。午後5時以降にこの通りを訪れるとサラリーマン風の人々が道路で立ちながら酒を飲んでいる

のにびっくりすると思います。これは、はじめから道路で飲んでいるのではなく、商店街の立ち飲み屋に入りきれない人達が道路に溢れてきているのです。このような場所ですから、男性だけの世界だと思われるかもしれませんが、近年では女性の姿もかなり多く見られるようになり、ようやくこの界限も男女平等の世界になりつつあります。

この街の喧騒と煙に包まれながら、酒を飲みつつ焼き鳥片手に仲間と議論するのが私にとっての至福の時間です。



生理学への道のり～良きメンターに出会って～

高知大学教育研究部医療学系基礎医学部門医学部
解剖学講座

内田 有希

群馬大学大学院医学系研究科高次機能統御系脳神経発達統御学遺伝発達行動学（行動生理学）の三輪秀樹さんからバトンを受け取りました。高知大学の内田有希と申します。三輪さんとは、私が博士課程2年に参加させて頂いた東京都医学総合研究所“夏のセミナー”で知り合うことができました。Molecularの実験はほとんど経験がない私に、電気泳動を優しく教えて下さったのを思い出

します。その後何度も偶然お会いし、研究や就職のことなどお話をさせて頂いております。三輪さん、今回 Afternoon Tea に執筆する機会を与えて頂きまして、ありがとうございます。

多くの執筆者が書かれているように、私も日誌で最初に読むのはこの Afternoon Tea であり、お話を頂いた時は嬉しくて二つ返事でお引き受けしました。その後、過去の素晴らしい記事を読み



図1. 時澤先生（左）と永島先生（右）

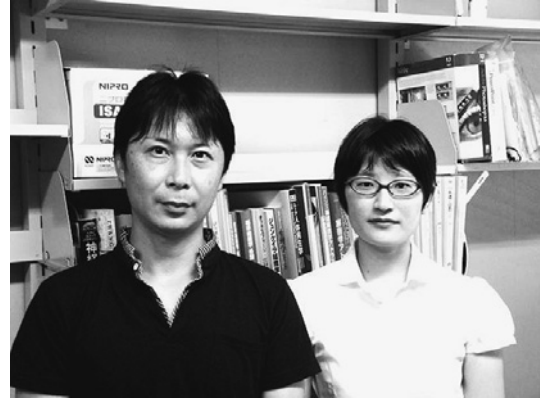


図2. 大迫先生（左）と本人（右）

直して不安になりましたが、今は少し開き直って自分らしく書かせて頂こうという心境に至りました。

皆さんにはメンターがいらっしゃいますか？メンターとは「人生経験の豊かな人、支援者、指導者、後見人、助言者、教育者の役割を全て果たす人」と定義されています（日本生理学会ウェブページより抜粋）。経歴が少し変わっている私が、現時点で研究が続けられているのも多くのメンターに恵まれているお陰だと思います。子供の頃から、生物とコンピュータに興味があり、将来は研究者になりたいと漠然と思い、早稲田大学人間科学部では神経内分泌学と教育情報科学を専攻しました。しかし、ポストク問題や学費（父が亡くなり母子家庭でした）への不安もあり大学院には踏み切れず、システムエンジニアとして就職しました。開発部門の長時間労働は普通ですが、よほど怖い顔でパソコンに向かっていたのでしょいか、世古部長が「有希ちゃん、仕事は笑顔でするもんだよ」と一言。はっとし、余裕のない自分が恥ずかしくなりました。今でも仕事をする上で大事な言葉として、心に留めています（実践できているかは自信がありません）。

その後、やはり学部生の頃から興味があった女性ホルモンの研究をしたいと思い、退社を考えま

した。母校の恩師である山内兄人教授、西村昭治教授、太田俊二教授に相談に行くと、しばらく疎遠になっていたにも関わらず親身になって話を聞いて下さり、進学の助言を頂き、母校の大学院統合生理学研究室（永島計教授）へ進学し、生理学に出会いました（やっとここで…）。生理学のホメオスタシスやフィードバック制御の考え方が情報系をかじった私には魅力的でした。永島先生、時澤健先生（図1）からは誌面では書ききれないほど研究、教育面で多くのことを学ばせて頂きましたが、本質的な研究をすること、（良い意味で）わがままになることの大切さを学びました（これまた、実践できているのか（汗））。

さて、ご縁があり、現在の所属講座の由利和也教授に拾って頂きました。医学部の文化もマクロ・ミクロ解剖も初めてで戸惑うことばかりです。しかし、ここでも良きメンターである生理学出身の大迫洋治准教授（図2）に出会うことができました。教育や研究に対する誠実な姿勢をお手本に、仕事に取り組んでいます。これからも人生の岐路で悩むことがあると思いますが、一人ではなく信頼できるメンターの皆様に相談して乗り切っていきたいと思います。そして、いつかは自分が、誰かのメンターになっていきたいものです。